

PLAN-EAは、情報システムを企業レベルで全体最適化するための方法論です。

Zachmanフレームワークや経済産業省のフレームワークなど、多くのEA(Enterprise Architecture:エンタープライズアーキテクチャ)がある中で、ビジネス系情報システム構造に適したフレームワークとして、「データセントリックアーキテクチャ」を核に、企業の情報システムの構造を策定します。

エンタープライズアーキテクチャの位置づけ

EAとは、企業の業務手順や情報システムの標準化、組織の最適化を進め、効率よい組織の運営を図る、つまりは、ビジネスとITの橋渡しを円滑に行うための設計思想・基本理念をいいます。

1987年にJohn A. Zachman氏が提唱した情報システムを設計するための枠組みが基礎となっており、1992年に情報システムだけでなく組織全体を対象とするよう概念が拡張されています。日本では、経済産業省の取り組みが大きな引き金になっています。

EAが重要なのは、環境の変化やそれに伴う多くの課題について、ITを効果的・効率的に活用して解決しなければならないためです。

ITを効果的・効率的に活用するためには、情報システムのあり方も、企業全体の最適化の視点から見直す必要があります。

何の青写真もなく個別最適のままアドホックに開発するのは、保守環境を複雑にするだけでなく、ビジネスチャンスも逃しかねません。

そこで、企業の全体最適化の指針、および企業全体のITガバナンスのために、EAが着目されているのです。

エンタープライズアーキテクチャ導入の難しさ

情報システム構造の全体最適化は、時間と工数がかかります。このため、全体最適化には中長期的・戦略的に取り組む必要があります。

エンタープライズアーキテクチャの成果物は、その種類と量が膨大です。

要求するすべての成果物を作成することは現実的ではありません。目的や効果目標値を設定し、作業を重点化すべきです。

また、企業において、通常は、全体最適化という名目では予算を通すことができません。これは、情報システムの保守コスト減・連結企業の在庫削減など、効果が見込まれて初めて取り組みが評価されるためです。

エンタープライズアーキテクチャは、これらの目的を達成するための価値観や枠組みを提供するものです。

導入においては、徹底的に効果にこだわる必要があります。

データセントリックアーキテクチャとは...

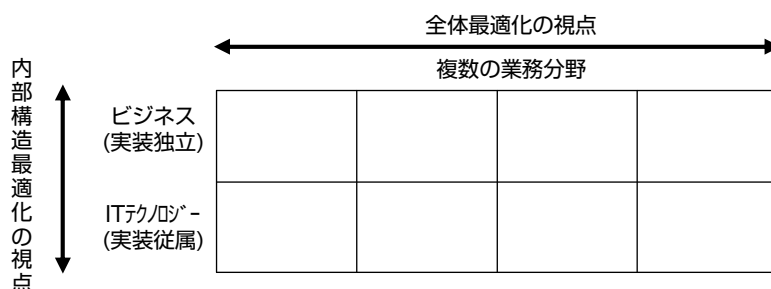
「データセントリックアーキテクチャ」とは、データ総研が経験してきたデータ中心アプローチによるシステム構築プロジェクトから蓄積した設計思想・基本理念です。標準化されたデータを最適化基盤の核と考え、企業全体の“One Fact In One Place”を実現するための情報システムアーキテクチャです。ビジネス・IT環境の変化に強い構造を実現します。

1. 情報システム構造を企業全体で最適化します。

データに基づいた業務分野別の情報システム構造にすることで、システムの重複を排除し、ビジネス環境の変化に即時対応可能な情報システムを実現します。

2. IT環境の変化に強い情報システムを実現します。

情報システムの仕様をビジネス仕様(実装独立)とIT仕様(実装従属)にレイヤーを分けることで、IT環境の変化に依存しないビジネス仕様を明らかにします。





PLAN-EAによるエンタープライズアーキテクチャの考え方

■One Fact In One Placeの原則

同じ意味のエンティティ・同じ意味のデータ項目・同じ意味の処理が複数箇所に存在しないことを原則とします。

■全体最適優先の原則

ビジネスビュー・概念モデルビュー・ソフトウェアビュー・プラットフォームビューすべてにおいて、個別最適ではなく、全体最適を重視します。

■工学的アプローチの原則

情報システムの構築を工業製品や建築物と同様に工学的に捉えます。情報システムの構成要素を部品として考え、標準化を行うことにより再利用を図ります。情報システムの仕様を標準化された図面をもとに検討し、かつ管理します。

■標準用語活用の原則

エンタープライズアーキテクチャの策定では、多数のステークホルダーが関与します。用語を統一し、コミュニケーション効率を図ります。

■ビジネス構造相似の原則

本来の情報システム構造は、ビジネスの構造を写像して得られるものと考えます。

エンタープライズアーキテクチャを策定する上で、ビジネス構造を知ることは、情報システムのあるべき姿を導き出すための重要な工程と考えます。

PLAN-EA導入の効果

■EA導入計画策定プロジェクトのスムーズな立ち上げ

EA導入計画の策定は、試行錯誤の繰り返しで、多くの時間を費やしてしまうものです。

方法論「PLAN-EA」では、データセントリックアーキテクチャを核としたフレームワークを規定し、エンタープライズアーキテクチャ策定で作成するドキュメントと手順をマニュアル化しています。したがって、立ち上げ時に無駄な時間・工数をかけず、スムーズにプロジェクトを実施できます。

■ITガバナンスの確立

EAの確立によって、企業全体の情報システムの最適化モデルが可視化・共有されます。これが、システム開発全体の指針(目指す方向)になります。

指針があることにより、統制の取れない個別開発がなくなり、他システムと連携のできない孤島システムの乱立が回避できます。

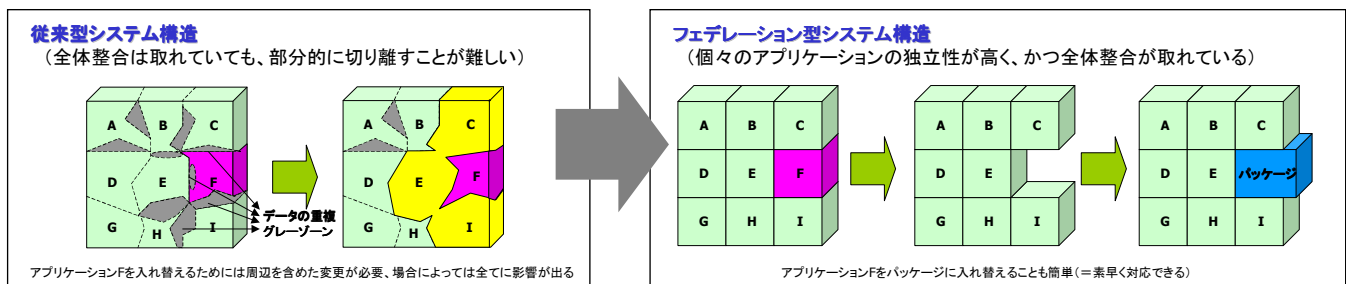
結果として、システムの全体最適化を実現します。

■柔軟性と即応性をフェデレーション型システムで実現

企業全体のデータの「One Fact In One Place」を実現することにより、機能間のインタフェースとなるデータの全体整合が確保されます。

また、各アプリケーションの独立性が高い構造になっているため、ビジネスの変化に即応できる、柔軟性・保守効率の高いシステムが実現します。

これらのことで、低コストでの開発と、保守ホストの削減に貢献します。



お問合せ先:株式会社データ総研 営業担当 TEL:03-5695-1651 / E-Mail:crm@drinet.co.jp

株式会社データ総研

代表取締役社長 黒澤 基博

1985年創立。データ設計と標準化に特化したITコンサルティングファーム。データ中心アプローチ(DOA)のパイオニアとして知られる。

PLAN-DB®、PLAN-CODE®をはじめとする設計技法や開発方法論をベースに、わが国のリーディングカンパニー約260社を支援。

800件を超えるデータ仕様ライブラリを有する。

東京都中央区日本橋小伝馬町4-11サンコービル TEL:03-5695-1651 FAX:03-5695-1656 <http://www.drinet.co.jp>